

『子どもたちを来させなさい！』

’21/05/23

聖書箇所: マルコの福音書 10章 13-16節 (新約 p.86)

ここに至るまで、イエス様は(少なくとも)2度に渡って、弟子たちに、ご自分が必ず多くの苦しみを受け、長老や祭司長、律法学者たちに殺され、3日後によみがえらなければならない! というようなことを訴えておられました。しかし、悲しいことに、当時の弟子たちは、いまいち、イエス様がおっしゃっておられるこの意味がよく理解できずにおりました…。今日のみことばは、そういったタイミングで起こった、ある出来事について記されてあります。

命題: 永遠のいのちについて、聖書のみことばは、どう教えてくれている？

今日のみことばでは、その時、イエス様が弟子たちに対して、憤られた(=激しく怒られた)ということが記されてあります。正直、イエス様が注意されたとか…、叱られた…、あるいは、不信仰をなげかれたというようなシーンは、幾つか見てきたと思うのですが、イエス様が憤られたというのは、そう多く記されてあるようなことではありません。…一体どうして、イエス様は、この時、激しく怒られたのでしょうか？

実は、そういったことは、今日これから見ていこうとしているテーマと深い関係があります。今日のみことばは、私たちが神の国に入るための方法と言うか…、言わば、永遠のいのちに関して教えられてあります。そこで、私たちは今日と来週とで(再来週も?)、永遠のいのちに関することを学んでいきたいと思えます。良いですか、皆さん? この…、永遠のいのちに関することは、私たちが何を置いても、1番に考えないといけないことであります。

だから、イエス様は、**マタイ 16章で、こう教えてくださいましたでしょ? 『人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのち(=永遠のいのち)を損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。』(マタイ 16:26)って…。**どうぞ、皆さんには、ここ数週間で語られるみことばを、特に、関心を持って聞いていただきたくお願いいたします。

さて、今日、私たちが見ていくみことばは、マルコ 10:13-16 のみことばです。言わば、イエス様が永遠のいのちについて教えてくださった…、その導入部分のようなみことばです。そこには、このように記されてあります。

- 13 さて、イエスにさわっていたかどうかとして、人々が子どもたちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちは彼らをしかった。
- 14 イエスはそれをご覧になり、憤って、彼らに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。
- 15 まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」
- 16 そしてイエスは子どもたちを抱き、彼らの上に手を置いて祝福された。

I・永遠のいのちは、**すべて**の者に必要である!

どうぞ、まずは、今読んだ 15 節に注目してください。ここで、イエス様は、『…子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。』とおっしゃっておられることから、ここで、イエス様が語っておられるのは「神の国に入るための方法」…、つまりは、救いと言うか、永遠のいのちについて教えてくださっていることは明白です。まずは、**このみことばから、永遠のいのちは、“すべて”の者に必要である!**ということについて確認していきましょう。

●この時の 状況 について

さて、まずは、この時の“状況”について確認をしていきましょう。…この時、イエス様の一行は、前回学んだように、ヨルダン川の東側におられました。そういったことは、並行箇所であるマタイ 19 章を見ると分かります。今日のみことばに記されてある、このエピソードは、イエス様が結婚や離婚について教えてくださった…、その直後に起こった出来事で…、つまり、この時、イエス様の周りには、12人の弟子たちの他、パリサイ人たちを含む、たくさんの群衆が居たはずなのです。

さて、その時、その群衆の中から、子どもたちを連れてきて、その親たちがイエス様のところへとやって来ました。これまた、並行箇所を見ると、この時、親たちは、自分の子どもたちの上に、イエス様の手を置いてもらって、祈ってもらおうと言うか…、イエス様から祝福してもらいたかったようです。…どうぞ、皆さん、誤解しないでください。彼らは皆、イエス様のことを、真の神、唯一の救い主として信じていたかどうかは分かりません。…と言いますのも、この当時には、有名なラビ(=ユダヤ教の教師)たちに祈ってもらうようなことが、ごく普通になされていたそうです。

現代の日本でも、誰か有名な人に触ってもらおうと縁起が良いとか、何かの恵みに預かれる? みたいな感覚ってありません? お相撲さんとか、プロ野球選手とか…。あれと似たような感覚かも知れません…。

しかし、それに対して、弟子たちは、そういったことを快く思わなかったようで…、弟子たちは、子どもや親たちのことを叱ったようです。恐らく、弟子たちは、イエス様が疲れていると思って、そのイエス様のことを疲れさせないように! という配慮から、その親たちのことを注意したのだと思います。…確かに、この聖書を見てみますと、イエス様の周りには、しょっちゅう、大勢の者たちが居て、イエス様は、その群衆を相手に、神の国の話をされたり…、あるいは、癒しをされたり…、あるいは、弟子たちのことを訓練したり…、また、祈りに専念されたり、という風に、イエス様は肉体的に、かなり疲れておられたのかも知れません…。

しかし、その弟子たちに対して、イエス様が憤られた! というわけです。実は、ここ 14 節で、イエス様が『憤って』と訳されてあるところに使われてあるギリシヤ語の動詞(ἀγανακτῶ)は、「憤慨する、激しく怒る…」と訳されるような言葉で、新約聖書全体の中でも、わずか7回しか使われていません。

●イエス様が憤られた 理由

しかし、一体どうして、イエス様は、この時、そんなにも激しく、弟子たちのことを叱られたのでしょうか? ⇒それは、このことが、彼らの救い…、つまり、永遠のいのちに関することであつたからです。そうじゃありません?

例えば、イエス様は、この少し前、**マルコ 9章で、こんな風におっしゃっておられます、『また、わたしを信じるこの小さい者たちのひとりにもつまずきを与えるような者は、むしろ大きい石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。』(マルコ 9:42)って…。**また、ルカ 17章でも、イエス様は、こうおっしゃっておられます、『この小さい者たちのひとりにも、つまずきを与えるようであつたら、そんな者は石臼を首にゆわえつけられて、海に投げ込まれたほうがましです。』(ルカ 17:2)って…。このように、イエス様は、霊的なことに関して…、特に、それが、他人に躓きを与えるような場合には、激しく怒られたのです。…と言いますのも、この救いというのは、すべての人たちに必要だからです! …違います?

一体、イエス様は、何を優先され…、また、何を目的に行動されていたのか? ⇒それは、神の栄光を現わすと同時に…、失われていた者たちを一人でも救うためです(ルカ 19:10、ヨハネ 12:47)! そうでしょ? …だから、イエス様は弟子たちの行為が彼らの躓きになったので、弟子たちのことを叱られたのです。

イエスは、あの取税人であったザアカイの元を訪れた時…、ルカ 19 章で、こんな風におっしゃってられます、『人の子(=わたし)は、失われた人を捜して救うために来たのです。』(ルカ 19:10) ×2 して…。そのように、イエスは、私たちを救うために来てくださったのです！イエス様から見た時、相手が小さい子どもであろうと…、あるいは、異邦人であろうと…、あるいはまた、売春婦であろうと…、例え、それが取税人であろうと、サマリヤ人であろうと、あるいは、罪人呼ばわりされている者であろうと、もちろん、パリサイ人や律法学者だって、それらは関係ありません！イエス様から見た時、私もあなたも！すべての者たちは皆、救いが必要な…、「失われた人」なのです…。だから、イエス様は、一生懸命に、この救いのメッセージを人々に伝えてくださったのです…。

II・永遠のいのちを得るには、**幼子**のようになることが必要！

どうぞ、今度は、イエス様がおっしゃられた、15 節の、『まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。』というお言葉に注目していきましょう。ここでイエス様が教えてくださったことは、**永遠のいのちを得るには、“幼子”のようになることが必要である！**ということ、を、一緒に確認していきましょう。

●この時に、イエス様が 教えて くださったこと

ここ 15 節で、イエス様は、『まことに、あなたがたに告げます…』とおっしゃって、今から話すことが、とても重要である！ということ伝える、“決まり文句”を使っておられます。つい先程も確認したように、イエス様は、こういったような永遠のいのちに関することを一番に気にかけておられたということが、こういったことから分かります。

さて、この時、イエス様は、どんなことを“教えて”くださったのでしょうか？⇒それは、先程も言いましたように、15 節の、『子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。』というお言葉です。どうぞ、皆さん、気を付けてください。ここで、イエス様は、何も、「子どもたちが神の国に入れる…」とおっしゃったわけではありません。イエス様は、『子どもの“ように”神の国を受け入れる者でなければ…』という風におっしゃられたのです。じゃあ、ここで、イエス様が言いたかった特徴とは、どのようなものでしょうか？…そのことを見ていく前に、と言うか、そのことの重要なヒントにするため、どうか、ルカ 18 章のみことばを引用させていただきます。

さて…、ここルカ 18 章のみことばですけれども…、今日、私たちは、今学んでいるみことばが、先週に学んだみことばの直後に起こったエピソードであるということ学びました。…どうぞ、ここルカ 18:15 をご覧ください。そこには、『イエスにさわっていたかどうかとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかた。』とあって、今日私たちが学んでいるみことばが記されています。

しかし、今、皆さんに注目していただきたいのは、その直前、ルカ 18:9-14 のみことばです。この部分は、今日のみことばの平行箇所である、ルカ 18:15-17 と全く無関係なものでしょうか？…いいえ、もしも、このみことばが、今日のみことばと全く無関係であったら、ルカが、この「パリサイ人と取税人の祈り」というエピソードを、わざわざ、この場所に書き記したルカの(≒本物の著者である聖霊の)意図が分かりません。実際、ここルカ 18:15 の冒頭には、新改訳第3版には訳出されていません(新改訳 2017 では、「さて」と訳出されてある)が、ギリシャ語の接続詞である「デ(δε)」という言葉が使われているのです。

この言葉は、前の文章を受けて、「しかし、ところが…」のように、その後で、反対の内容が続く場合でも、あるいは、「さて、次に…」という風に、それまでの内容を受けて、それが、どう発展するか、というようなことを説明する場合に使われるような接続詞なのです。…ということは、つまり、今日のエピソードと、この「パリサイ人と取税人の祈り」という例え話とは、決して、無関係では無いのです。

● 幼子 たちの特徴

どうぞ、そういったことを踏まえて、今日の 15 節のみことばを考えていきましょう。実は、ここ 15 節に使われている『子ども』という言葉は、まだ、生まれて間もない小さな子どもを表わすような「パイディオン」という言葉が使われてあります。…ちょうど、イエス様がベツレヘムでお生まれになって、その約 1 年後？に、東方から来た博士たちがキリストを尋ねてやって来たという、あそこのみことばで記されている言葉が、この「パイディオン」というギリシャ語です。

それに対して、もう少し大きな？子どもたちを表わすギリシャ語の言葉として、「テクノン」という言葉があります。この言葉(τεκνον)は、例えば、ルカ 2 章で、当時、12 歳であったイエス様がエルサレムの神殿に行かれた時に、この「テクノン」という言葉が使われていますが、この言葉は、「少年とか、あるいは、(年齢を問わず)子ども⇄親…」を指す場合に使われたりします。

いかがでしょう？…要は、ここマルコ 10:15 で、イエス様がおっしゃられた、『子どものように神の国を受け入れる者でなければ…』という「子ども」のイメージは、今の小学生のような大きな子どもではなくて…、まだ、1-3 歳ほどの小さな子ども…、まあ、私なら、「幼児」と表現すると思うのですが…、そういった年齢の子どもたちを、ぜひ、皆さんにもイメージしていただきたいと思います。

さて、そのような、1-3 歳ほどの小さな子どもたちが持っている特徴と、先程見た、ルカ 18 章の「パリサイ人と取税人の祈り」に見られる取税人に共通する特徴…、共通するイメージって何だと思われませんか？⇒私は、それが、「謙虚さ、あるいは、素直さ」だと考えます。

つい最近、マルコ 9 章のみことばからも学んだように、1-3 歳頃の小さな子どもたちって、ある意味、謙虚だと思いませんか？…実は、辞書で、「謙虚の対義語」を調べましたら、「横柄、高慢、傲慢、不遜…」などと挙げられていました。そう言われたら、確かに、この例えに出てくるパリサイ人って、横柄と言うか、高慢、不遜という言葉がピッタリ来ないでしょうか？

ルカ 18:9-14 で、イエス様は、こう教えてくださっています。『9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとは取税人であった。11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』13 ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』14 あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。』

⇒いかがですか？…確かに、小さな子どもたちには、罪が無いとまでは言いません。聖書的に見れば、どんな小さな子どもたちであっても、罪を持って生まれてきております(詩篇 51:5、ローマ 3:10)。また、ある意味では、小さな子どもたちの方が我がままだったり、自制ができなかったりします。…でも、1-3 歳ほどの小さな子どもたちは、まず、自分自身の行ないを見て…、「私は、清い人間だ！私は、自分の行ないで救われる！」とは言わないでしょ？…小さな子どもたちは、自分が如何に非力で、誰かに守ってもらわないと…、誰かが助けてくれないと、何も出来ないということ、をよく知っているからです。

私たちも、そのように、自分自身の弱さや罪深さを認めて…、それを神様の前に悔い改める必要があるのです！パリサイ人のように、私は、あの人より清いとか、私は良い人間だ！私は、行ないによって、自分自身を救える！などといったような、横柄な考えではなくて…、神様の前に、素直に、自分の弱さや罪深さを認めることが必要なのです。

例えば、イエス様は、「山上の説教」の1番最初に何と教えてくださいました？⇒マタイ 5:3、『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。…』という言葉で、イエス様は、あの長い山上の説教を始めてくださって…、私たちは何よりもまず、自分が罪深くて…、霊的に破産しているということ、もう自分で自分を救えない！ということ、まず、気づくことが無いと救われられないわけでしょ？

そういう意味で、小さな子どもたちは、自分が如何に非力で…、頼りないか…、あるいは、愚かな存在であるかを十分理解している、と言い得るのではないのでしょうか？…問題は、自分の罪深さや愚かさを悟った後に、真の神様の恵みにすがろうとするかどうか、イエス様というお方を自分の救い主として、信じ受け入れるかどうか、ではないでしょうか？

Ⅲ・永遠のいのちについて、私たちは **教え** なければならない！

さて、その次に、今日のみことばから少し離れて、私たちが考えていきたいことは、私たちは、そういった救い…、つまり、**永遠のいのちを持つことができるように、そのことを“教えて”いかなければならない！**ということなのです。

● 私たちに託された 責任 !

まずは、私たちに託された“責任”について確認をしていきましょう。どうぞ、子育てに関する最も大切なみことばとも言われる、申命記 6 章のみことばを紹介させていただきます。そこには、このように記されています、『3 イスラエルよ。聞いて、守り行いなさい。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたの父祖の神、【主】があなたに告げられたように、あなたは乳と蜜の流れる国で大いにふえよう。4 聞きなさい。イスラエル。【主】は私たちの神。【主】はただひとりである。5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。6 私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。7 これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。8 これをしるしとしてあなたの手に結びつけ、記章として額の上に置きなさい。9 これをあなたの家の門柱と門に書きしるしなさい。』(申命記 6:3-9)

⇒いかがです？…今読んだ7節には、**何と教えられておりました？『これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい！』**とありますでしょ！ 私たちには、子どもたちに対する責任があるのです。親として…、教師として…、大人として…、あるいは、先に救われた者としての！…そうじゃありません？

私たちは皆、私たちの周りにいる子どもたちが、幸せになっていくことを願っているはずですが、そのために1番大切なのは、勤勉でも、学歴でも、お金でも、才能でも、運でもありません。私たち人間が本当の意味で、幸せになって、最高の祝福に預かるために必要なものは、永遠のいのちであり…、そのために必要なのが、本物の信仰です。そうでしょ！

果たして、私たちは、このみことばが教えるように、いつもいつも、神様のことを1番に愛し、そのみことばを心に刻んでいるのでしょうか？…確かに、このみことばは、当時のイスラエルに対するものですから、私たちが今、聖書のみことばを記した紙を小さな小箱に入れて、それを額や手に結び付ける必要はありません。しかし、神様のみこころは、そう大きく変わるものではありません。…だから、ユダヤ人でなくても、敬虔なクリスチャンの方々は、自分の目が付くところに、聖書のみことばを飾っていたり、意識して、トイレやお部屋にみことばを置いたり、あるいは、みことばを覚えたりします。…皆さんは、そういった努力をされていますか？…私たちは、自分たちが語る言葉だけでなく、言葉以上に、日々の行ないでもって、真の神様のことと、私たちが持っている…、この信仰を証していかなければいけないのです…。

どうか、今度は、Ⅱテモテ書のみことばを紹介させていただきます。テモテというのは、パウロの共同執筆者で、パウロの良き同労者でした。テモテは、パウロの晩年に、エペソ教会の監督になった人物です。そのようなテモテは、どのようにして、信仰を持つに至ったでしょう？…Ⅱテモテ 1 章には、**こんな風に記されています、『私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。』(Ⅱテモテ 1:5)**

⇒このみことばから分かる通り、テモテが信仰を持ったのは、まずは、テモテの祖母ロイスが信仰を持っていたからで…、それが娘のユニケ(=テモテの母)に受け継がれて、その信仰がテモテに伝わったものだ、このみことばは教えてくれています。

Ⅰペテロ 2:2 には、**こう教えられてあります、『生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。』**って…。⇒このみことばは、私たちが救いを得られるのも…、また、私たちが霊的に成長させられるのも、聖書のみことばしか無い！ということを見せてくれています。もちろん、私たちのことを救ってくださるのも…、成長させてくださるのも、聖霊なる神様ですが、その聖霊は、私たちが成長させるために、聖書のみことばを用いられるのです…。だから、私たちはみことばを学び、それを心に深く刻んでいくことが必要なのです。

● 祭司 エリ の失敗例！

どうぞ、今度は、旧約聖書の人物である、祭司“エリ”のことを紹介させていただきます。祭司エリには、息子たちがおりましたが、Ⅰサムエル記 2 章には、そのエリの息子たちについて、次のように記されています。『12 さて、エリの息子たちは、よこしまな者で、【主】を知らず、13 民にかかわる祭司の定めについてもそうであった。だれかが、いけにえをささげていると、まだ肉を煮ている間に、祭司の子が三又の肉刺しを手にしてやって来て、14 これを、大なべや、かまや、大がまや、なべに突き入れ、肉刺しで取り上げたものをみな、祭司が自分のものとして取っていた。彼らはシロで、そこに来るすべてのイスラエルに、このようにしていた。15 それどころか、人々が脂肪を焼いて煙にしないうちに祭司の子はやって来て、いけにえをささげる人に、「祭司に、その焼く肉を渡しなさい。祭司は煮た肉は受け取りません。生の肉だけです」と言うので、16 人が、「まず、脂肪をすっかり焼いて煙にし、好きなだけお取りなさい」と言うと、祭司の子は、「いや、いま渡さなければならぬ。でなければ、私は力ずくで取る」と言った。17 このように、子たちの罪は、【主】の前で非常に大きかった。【主】へのささげ物を、この人たちが侮ったからである。』(Ⅱサムエル記 2:12-17)

⇒いかがです？ここに書かれてあることを分かってくださいますよね？…この時、祭司エリの息子たちは、祭司職に就いておりました。言わば、神に仕え、神と人間との仲介をするべき立場でありました。しかし、その息子たちは、とても、祭司とは呼べるような者ではありませんでした。彼らは、神を侮って、神様の前に、たくさん罪を犯し続けていたのです。

しかし、問題は、この後です。Ⅰサムエル記 2:27-30 には、**こう続いています。『27 そのころ、神の人がエリのところに来て、彼に言った。【主】はこう仰せられる。あなたの父の家がエジプトでパロの家に属していたとき、わたしは、この身を明らかに彼らに示したではないか。28 また、イスラエルの全部族から、その家を選び、わたしの祭司とし、わたしの祭壇に上り、香をたき、わたしの前でエポデを着るようにした。こうして、イスラエル人のすべての火によるささげ物を、あなたの父の家に与えた。29 なぜ、あなたがたは、わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住む所で軽くあしらい、またあなたは、わたしよりも自分の息子たちを重んじて、わたしの民イスラエルのすべてのささげ物のうち最上の部分で自分たちを肥やそうとするのか。30 それゆえ、——イスラエルの神、【主】の御告げだ——あなたの家と、あなたの父の家とは、永遠にわたしの前を歩む、と確かに言ったが、今や、——【主】の御告げだ——**

絶対にそんなことはない。わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶ。わたしをさげすむ者は軽んじられる。』

⇒いかがでしょう？ 皆さん、分かってくださいます？ …この時、祭司エリのところに、恐らくは、御使いが人間となったような存在がやって来ます。その人物は、神様からのお言葉を語って、こう言うわけです、「なぜ、あなたは、わたしへの捧げ物を軽く扱うのか？ また、なぜ、あなたは、神であるわたしよりも、自分の息子たちのことを重んじたのか？ 優先したのか？ …それゆえ、神は、あなたを退けられる！ わたしは、わたしを尊ぶ者を尊ぶし、わたしをさげすむ者は軽んじられる！」って…。そうして、この後、4章を見ますと、イスラエルは、ペリシテに敗れて、祭司エリの息子たちが死んでしまうだけじゃない…。何と、神の箱も、ペリシテ人たちに奪われてしまうのです。…このように、真の神様を軽んじる者は、決して、その神様からの祝福に預かることはできないのです…。

<励ましの言葉>

さて、問題は、私たちです。…確かに、神様のおっしゃる通り、子どもたちに、神様のみことばを伝えても、それで子どもたちが救われるかどうかは分かりません。…と言いますのも、人を救うのは、私たち人間ではなく、神の御業だからです。しかし、その神様が私たちに託されたのは、私たちが子どもたちを救うことではなく…、子どもたちに救いのメッセージを伝えていくことです！ 私たちが、子どもたちに、真の神様のこと…、救いのこと…、最も価値あることについて教えてあげるのは、私たち親の…、あるいは、先に救われた者たちの責任であります。

私たちは、子どもたちに、聖書のみことばを伝え…、真の神様がおられること、私たちには罪があって、神様に裁かれるべき存在であるということ、そのために、御子イエス様があの十字架上で裁かれてくださった、本来なら、私たちが受けるべき罪の裁きを身代わりに受けてくださったこと、そして、約束通り、イエス様が3日目によみがえってくださったこと…、私たちには、救いのチャンスが与えられていることなどを、子どもたちに伝えていくべき責任があります。

でも、何度も言うように、人を救ってくださるのは、神様です。だから、私たちは、神様のおっしゃる通りに、子どもたちに福音を伝えながら、神様に祈っていくのです。この祈りは、すぐに答えられるかも知れませんが、あるいは、10-20年後に、叶えられるかも知れません。あるいはまた、一生、聞いてもらえないかも知れません。…と言いますのは、すべてを御支配なさっておられるのは神様だけであり…、常に、神様の最善だけがなされるからです。でも、神様を本当に信じて、救われた者たちは、すべてのことを、神様のみことばにお任せすることができていくのです…。

どうか、今日、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、ますます、神様のお言葉に沿って、子どもたちだけでなく…、まだ、この救いに預かっておられない方たちに、この救いのメッセージを伝えていくことができますように…。願わくは、私たちを通して、神様が救われる方たちを与えてくださいますように、お祈りいたします。